

です。それから、えびだるっていう漁法もありました。これは、冬の寒い間、漁師が漁に出られない時に冬中いっばいかかって竹でこしらえるんです。中にはぬかと魚のあらとぐつぐつ煮たてたものを「つつこ」っていう藁でこしらえた細い筒に詰めて、それをえびだるの中に入れてるんです。そうすると、えびってというのは、とても悪食なんですよね。だからたるの中に入れてくる。

漁師は次の日に自分の家の印のしてあるたるを引き上げに行くんです。どこのたるにもちやあんと棒に印がしてあります。だから、ああこれは源左エ門のだ、ああこれは七左エ門のだってわかるんです。でも、昔はとれたんですよねー。よこた策っていう大きな策があったんですが、これに四ツも五ツもとれたんです。今はいなくなっちゃって、情けないぐらいだっていますよ。

その頃は、いやあ水はともきれいでした。何しろ漁師らは水なんか持っていけないんですから。川の水を飲んでんだんです。今はどぶですけど、東電の前の川なんかもきれいな水が流れていてね、目高、鮎、たなごなんかが沢山とれたんです。だから皆東電の前の橋あたりで釣をしたんです。桜川なんてあんな速い所へ行く人はいなかったね。朝は魚が泳いであるのがはつきりと見えたとね。そうそう、今駐車場になっちゃったけど、あそこに八千

代橋というのがあったでしょう。あそこら辺は釣の名所でした。船に乗っていると、川の水底がくつきりと見えただんですよ。こどもの頃は泳ぎにも行きました。桜川のはき出しを「大洲」って呼んでいたんですが、そこへ皆で泳ぎに行っていたんです。どこの家でもこどもらは行っただんです。それも昼日中は暑いもんだから、夕方ごはん食べて、月が出てから、櫓をこいでいくんです。船をこぐのは女でも皆お手のものだったからね。そうすると、大洲あたりの水は、とてもきれいできれいで、それはお話にならないぐらいでしたよ。何しろ船の上から、ここは石だ、ここは砂だ、ああここは砂利だ、なんてのがちやあんと分ったんですから。それでほら、水草が生えてるのが、水底からはつきり見えたんですよ。ゆらゆらゆらゆら、波にゆれているのがとってもきれいに見えたもんです。魚なんかも見えました。水草の間を、そっちへ行ったり、こっちへ行ったりするのがよく分ったんです。今考えるとまるで夢みたいでした。

それからこの近くには極楽田んぼがありました。東電の前の川から土浦館の裏、それから永井さんという醬油屋の裏あたりまで広がっていて、そこは田んぼと蓮田だったんです。その間を水路が縦横に走っていました。ここは湿地で、下駄をはいては歩けないんです。びしょび